

生徒の手による国際協力

「アンニーマーンニャン（これは何ですか）？」

8月下旬、ラオスの首都ビエンチャン——朝早くから、町中の市場はたくさんのお客でにぎわっている。現地の人々に交じって買い物をするのは、日本から来た高校生たち。電卓と手帳を片手に、民芸品や銀製品、織物などを選んでいく。「タオダイ（いくらですか）？」「ルットダイボー（少し安くありませんか）？」。片言ながらも、一生懸命覚えたラオ語で交渉するのは、高知市立高知商業高等学校生徒会のメンバー。今や毎年恒例となった現地での商品買い付けは、同校が取り組むラオス学校建設支援の一環だ。

高知商業とラオスが出会ったのは1994年。それまでは生徒会が中心となつて赤字への募金を行っていたが、当時顧問だった岡崎伸二先生（現同校教頭）は、「何かもつと、形になることができないか」と考えていた。そこで偶然見つけたのが、高知出身のJICA専門家OBが設立した「高知ラオス会」の紹介記事だった。活動内容は、ラオスの学校建設支援。先生からその話を聞き、これだ！と思った生徒たちはすぐに会と連絡を取り、支援に参加することになった。

どうせなら、商業高校ならではの取



ビエンチャンの織物屋さんにて。「ラオス独特の鮮やかな柄の布は、特に人気があります」と織物担当のメンバー

り組みにしたい。そこで思い付いたのが、校内に模擬株式会社を設立し、生徒、教職員、保護者が出資するという方法。集まった資金を使い、年1回現地で民芸品などを買い付けて文化祭で販売し、その収益の一部をラオスの学校建設に充てている。もちろん、株主にも収益は分配される。「自分も参加している」と実感できる仕組みです。さらに2000年からは、地元の「はりまや橋商店街振興組合」の協力のもと、毎年秋に「はりまやストリートフェスティバル」を開催し、商店街でラオスの商品を販売している。このイベントは、高知の人にラオスを身近に感じてもらうだけでなく、地域の活性化にもつながっているという。



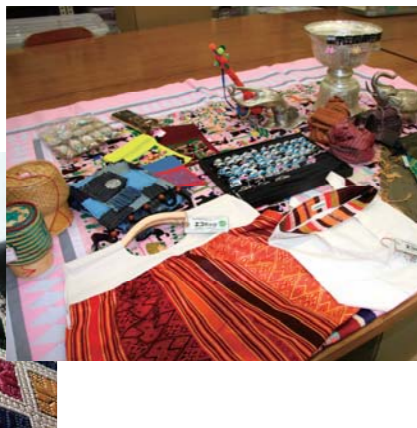
毎年恒例のラオス訪問では、建設を支援した学校で聞き取り調査や交流を続けている



「ラオスの子どもたちの笑顔が、日々の活動のパワーになっています」。力強く話すのは、3年生の遠山望美さん。「中学生のときに活動について知ってから、ずっと参加したいと思っていました」。生徒会長を務める彼女は、高校生活で3回ラオスの地を踏んだ。

はりまや橋で高知とラオスをつなぐ

ラオスへの支援が始まったのは15年。これまで建設に協力した学校は6校。数年前からは学校建設にとどまらず、新しい取り組みにも挑戦している。その一つが、本当に必要とされている協力を探るために、昨年からは始め



今年ラオスで仕入れてきた商品の一部と「はりまやばし」



高知とラオスが共に幸せになれる協力を

15年にわたり、ラオスの学校建設を支援してきた高知市立高知商業高等学校。その取り組みは、地域を巻き込んでさまざまな形で広がっている。



ラオス学校建設を支援する、高知商業高校生徒会執行部

た現地の学校での聞き取り調査だ。「実は、当初花だんを贈ろうと計画していたのですが、それが本当に相手の望んでいることなのかと話し合ったんです。」と顧問の弘瀬博英先生。「教室の壁が壊れているので修理が必要」「本を読む図書館がない」「教科書やノートが足りない」など、学習に対する切実な状況を知ることができた。それに応えるべく、今年にはラオス訪問時に木材を調達し、本棚を作ってプレゼントした。「図書館をすぐに建てることは難しいけれど、本棚なら現地の人と一緒に作る事ができる。これからも、高知商業だからできる協力」を続けていきたい」と弘瀬先生は思いを語る。

また、はりまや橋商店街木造アーケード10周年を記念し、生徒たちのアイデアで市内の観光名所「はりまや橋」の欄干をモチーフにした箸を商品化。その名も「はりまやばし」——材料には高知の間伐材※、箸袋にはラオスの布を使用。まさに「高知」と「ラオス」の懸け橋となる商品だ。商店街などで販売され、新しいお土産品としても人気がある。

これらすべての活動の源となっているのは、生徒一人一人の熱い思い。3年生の和田鮎美さんはその思いをエッセイにし、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2008」に応募。見事優秀賞に選ばれた。現在、

青年海外協力隊（村落開発普及員）としてモザンビークで活動する古谷綾さんも高知商業の卒業生。高校時代に培った国際協力の経験を生かし、現地で奮闘している。

「私たちが活動を続けることができるのも、先生や家族、地域の皆さんの力があってこそだと実感しています」と生徒たちは口をそろえる。大人たちの温かいまなざしが、何よりも大きな支えとなっているのだ。

「コプチャイ（ありがとう）」。ラオスでも日本でも、いつも感謝の気持ちを忘れない。彼女たちの明るい声と真つすぐな瞳が、今日も高知とラオスをつないでいる。

※今年度は福井県の業者に製造を依頼。

国内でも珍しい木造アーケードを持つはりまや橋商店街で開催される「はりまやストリートフェスティバル」。地域の恒例行事として定着しており、毎年楽しみにしている人も多い